
そんなはずじゃなかった

花子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんなはずじゃなかった

【Nコード】

N6787T

【作者名】

花子

【あらすじ】

図書館にいつも通う夕菜・・・
いつものあの席に・・・違う人が・・・

出会い

ここは私が毎日通っているとても静かな中央図書館

大きな窓から日差しが眩しいくらいに降り注ぐ席が私のお気に入り
の場所

なのにその席には、今日は先客がいた。

なんかとても背が高く真つ黒の髪、黒ぶち眼鏡・・・

私は小林夕菜・19才・高校卒業後すぐに上京した。

義母とあまりうまくいってなかったから・・・

今は叔母さんの経営している喫茶店で働かせてもらっている。

叔母さんは父の妹でいつも大人しい私を心配してお店の暇な時間こ
の図書館に

通うことを進めてくれた。それでないと外になかなか足が向かない
から・・・

「夕菜ちゃん、ランチタイムも終わつたしそろそろ行ってもいいよ」
叔母さんは大体ランチタイムが終わる頃私に声を掛けてくる。

叔母さんは34才だけどもとても若々しい。私から見ても三十台には
とても見えない

客商売だからかな？小さいお店だけど結構常連さんもついてて、こ
れからの時間

のティータイムは叔母さんとおしゃべりしたい常連さんが集まって
来る。

外の植木にみずやりしてから図書館に出かけた。

また今日も私のお気に入り席にあの黒ぶち眼鏡の人が座っている。
なぜ？

ここに通いだして半年以上経つけどあの場所はこの時間帯、日光が

よくあたるから

人気が無かったはず・・・残念だけどまた違う場所に座ろう・・・

私はお気に入りの作家さんの恋愛小説を片手に持ってキョロキョロした。

でも、本当はあの場所がいいなーと黒ぶち眼鏡の人の方を見ると手招きしてる。

なんで？私の後ろに誰がいるとか？振り返り確認するが誰もいない。

・・・私・・・

まだ手招きしてる。行った方が良いのかな・・・でも知らない人だし。

・
黒ぶち眼鏡の人の方から私に向かい歩いてきた・・・なぜ？

もしかして見ていた事がばれていた・・・隣まで来た眼鏡の人は

「良かったら隣に来て本を読みませんか？」

と小声で囁いてきた。思ったより若い人みたい・・・私は隣の隣の席に腰掛け本を

読む事にした。私が本に夢中になってる間・・・眼鏡の人は私の隣に移動していた。なぜ？

私はいつも夕方の5時には、店に戻る。隣の人に一声掛けるべき？

小声で

「お先に失礼します」

と声を掛けると

「またね」

と言われた。なぜ？また明日もいるの？

今まで図書館で眼鏡の人を一度も見かけた事は無かったのに・・・

「ただいま、帰りました」

私が裏口からお店に戻ると

「夕菜ちゃん、今日お客さんに高菜の漬物貰ったんだ。夕飯高菜チヤーハン食べたいなー」

と叔母さんが笑顔で擦り寄ってきた。可愛い・・・

「じゃ夕飯は高菜チャーハン作りますね」

私はすぐに支度に取り掛かる。でも高菜チャーハンはとても簡単・・・

高菜の漬物を細かく切って置いて・・・

フライパンを温め油を入れて溶いた卵を入れスクランブルにして一回取り出し

フライパンでご飯と高菜の漬物を炒め塩・胡椒して最後に取り出した卵を戻し炒める。

いたってシンプルなチャーハン。叔母さんは最後にチョッピリ醤油をたらして炒めた方が

好きみたい。それにスープとサラダをつけて完成

お店が空いてる時、交代で食事をとる。私がお店の様子を窺うとオーダーは全部出てるみたいだし

今の内なら叔母さんも食事できる。

「叔母さんチャーハンできたよ。私、店番してるね」

「ありがとう夕菜ちゃん、でもお店では叔母さんじゃなくて里奈さんて呼んで欲しいな」

なんか叔母さんじゃ本当におばさんみたいでやだなー」

里奈さんはわざと拗ねたふりをしてチャーハン食べに行った。

一人店番しながら今日の図書館での事を考える。

彼は前から私の事を知ってた？そんな事はないか、だって私は彼の事を知らない。

でも今まで回りに目がいつてなかったかも・・・

「すいません。お会計おねがいします」

いけない、今はバイト中だった。バイトに集中しなきゃ・・・
お会計を済まし、

「ありがとうございました」

次の日・・・今日は図書館行くのやめようと思う
だって知らない人と関わるのは怖い・・・

今日は公園で一人、ベンチで本を読むことにした。太陽が眩しい、
ここは外だから日光が直接だ。

日陰のベンチに移動しようかな？立ち上がったら眩暈がした・・・
倒れると思ったら隣から手が出てきて受け止めてくれた。

隣を見ると眼鏡の人、なんでここに・・・

「今日図書館に来なかったから捜していたんだ。こんな所にいたら
日射病になっちゃうよ。ちょっと待って、ここに腰掛けていて・・・」
彼は走って行ったかと思ったらハンカチを濡らして戻ってきた。

「これをオデコにあてといて、解かった？じゃまた待ってて」
と言いながら駆けて行った。戻ってきた彼の手にはペットボトル、
それを

「はい」

って渡された。飲めという事かな？ペットボトルのお茶を飲むとと
ても冷たくておいしい・・・

「いろいろありがとうございます。どうしてここが？」

「僕の感かな？」

よく解からないが助けてもらったのは変わらない。どうして私を捜
すの？

「今日は時間が無いからまた明日図書館で会いましょう」
と言って彼は去って行った。なんだったんだろう。

出会い（後書き）

のんびりの更新になります。

再び

私は、叔母さんに眼鏡の人のことを相談することにした

「ただいま戻りました」

店に戻ると叔母さんが

「夕菜ちゃん、顔が赤くない？熱があるんじゃない？」

慌てて薬箱を取り出し中から体温計を持ってきた。

「熱が無いか、測って診て？」

体温計を受け取ると、椅子に腰掛け脇に体温計を挟んだ。

言われてみると身体がだるいかも、ピピピー体温計を見ると38
隣から覗き込んできた叔母さんは、

「やつぱり熱があるみたいね。今日はお店はいいから上に行って休
んでいらつしやい。暖かくして布団に入るのよ。後でお粥を持って
つてあげるから」

心配そうに囁いた。

眼鏡の人のことを相談する間もなく、パジャマに着替えベットに入
って、ものの数分で眠ってしまった。

目を覚ますと外は真つ暗（私だいぶ寝ちゃったんだ）

ドアを叩く音が聞こえ、叔母さんが部屋に入ってきた。

「夕菜ちゃん大丈夫熱少しは下がっているといいけど」

ポーとしている私の脇に体温計を挟んだ。

身体が重くて動きたくない、熱あがったのかな？

ピピピピー体温計を見ると39　ちよつと上がったみたい。

叔母さんが慌てて

「夕菜ちゃん大丈夫？病院行こうか？」

と言ってくれるけど今動きたくない。

「寝ていれば大丈夫だよ」

そう答えて、そのまま私はまた寝てしまったみたい。

おばさんが一晩中看病してくれていたことはなんとなく覚えている。夢に出てきた母と叔母さんの背中が重なって見えたから・・・それから二日間私は寝込んだ。

私は結局夏風邪だったみたい。

季節の変わりめは結構苦手かも、叔母さんに

「しばらくは大人しく室内で過ごしてね」

と笑顔で言われ、部屋で掃除をしたり、洗濯したり、読書をして過ごした。

夕食には叔母さんの好物を作ったりして、（家事は結構好きだから）あつと言つ間に一週間が過ぎていた。

今日から叔母さんの許可が下りたのでお店の仕事を再開した。

「いらつしゃいませ、ご注文はお決まりですか？」

お水とお絞りをテーブルの上に置きながら注文を聞く。

「コーヒーを一つ」

「ホットで宜しいですか？後モーニングは付けますか？」

「はい、お願いします」

この人は毎日ここで目覚めのコーヒーを飲んでいくサラリーマンのおじさん、

（私の感だと叔母さんに好意を寄せている。私が注文を取りに行くときとあきらかにがっかりした態度を取る）

私はカウンターの中の叔母さんに注文を通してからこっそり叔母さんの耳元で

「運ぶときは里奈さん持つてってあげてね。あの人、喜ぶよ」

と囁くと理解したのか？ウインクされた。

里奈さんは歳の割には若く見えるから地味な私よりお客さんの受けが良いみたい。

コーヒーとモーニングのセットを持った里奈さんがおじさんの席に

向かうとおじさんの顔が

微妙に赤い・・・（あの人独身かな？）余計なことを考えてしまう。

「お待たせしました」

緊張気味のおじさんが、

「いつもこの店のコーヒーは美味しいですね」

と照れくさそうに里奈さんに話しかけた。

「ありがとうございます。お客様も、毎日いらして頂いてありがとうございます。ありがとうございます。せっかくですから

コーヒーのチケットはいかがです？10枚綴りで1杯お得になりますよ」

満面の笑顔で里奈さんが微笑むとおじさんは嬉しそうに、

「じゃそのチケットお願いします」

とお金を差し出した。

さすが商売上手、里奈さんの背中を見つめながら関心してしまう。

お昼のランチの時間も終わり里奈さんが、

「夕菜ちゃん久し振りに図書館行ってくる？」

そろそろ前に借りた本の返却日近づいているんじゃない？」

里奈さんに言われて思い出した（確かに前に借りた本そろそろ返却日が近づいている）

悩んでいたことなんてすっかり忘れて図書館に向かった。

久し振りの外はさすがに日差しがきつい。

そろそろ夏が近づいているから、外に出るときは帽子を被らなきゃなんて思いながら呑気に歩いていた。

後ろから、

「久し振りですね」

と声を掛けられ心臓が止まりそうな程びっくりしてしまった。

振り返った私の顔を見て、

「驚かしたみたいですね」

とっても反省している眼鏡の彼の様子に思わず、ふきだしてしまっ

た。

「すいません。久し振りの外だったから考え事をしていたんです。そんなとき声を掛けられたのでちょっとびっくりしてしまって、笑ったのはシュンとした貴方の様子がなんだか楽しかったから本当にすいません」

頭を下げた拍子に手提げ袋に入れてきた図書館の本が全部落ちてしまった。

慌てて本を拾い集めようと座り込むと隣の眼鏡の彼も一緒に拾ってくれる。

「はい、どうせ図書館行くなら持ちましようか？」

私の持っている本を奪い取ると先を歩いて行く。

思わずその後ろ姿に見とれてしまう彼がこちらを振り向いた時目が合った。

私は慌てて、

「待って下さい。自分で本、持ちますから、本当大丈夫ですから・・

」

彼に駆け寄った。

彼は良いですよと言いながら話題を変えてくる。

「最近図書館にきてなかったのはどうかされていたんですか？」

「夏風邪をひいたみたいで、身体の調子を崩していたんです」

なんだか知らない人にこんな話しをするのは恥ずかしい。

「元気になられたみたいで良かったです。」

貴女の姿が図書館に見えなくて寂しかったんですよ」

真面目の顔で言われても・・

「俺自分の名前乗ってなかったですね。橘聡、24歳です」

（こんな時は自分も名乗んなきゃ不味いよね？）

「小林夕菜、19歳です」

声が小さくなる。こんな事は慣れていない。恥ずかしい前を歩く彼の背中を見つめながら、どうして橘さんは私に近付いてくるんだろうと思う。

見た目も平凡で目立たない私なんか、

「此処までで良いですよ。ありがとうございます」

カウンターの手前で本を受け取った。

本を返却していつもの席に向かうと、やっぱり彼の姿（仕事してないのかな？）

再び（後書き）

本当にのんびりです。

彼の想い

私は、眼鏡の人の隣に腰掛けた。

どんな本を読んでいるんだろう？今頃気になった。

今までは彼の存在が気になっていたから、

隣を見ると本を読んでいそうなのに目を閉じている。

確かにこの席は日が良くあたりポカポカしている。でもそろそろ時期的に暑いと思うけど・・・

顔を見るとうつすら汗を掻いている。スーツ姿だし暑いよね、

眠る彼の隣でそっと本を読み出した。静かに時が流れていくのは心地良くと久し振りに感じた。

どのくらい時間は経ったのだろう。彼は突然立ち上がると、

「今日はちよつと用事があるから先に失礼するね。夕菜ちゃんも病み上がりだから体には気をつけるんだよ」

背中が忙しそうに遠ざかっていく。

聡はもつと夕菜の隣で寛いで居たかったが今から会社に戻らなければならぬ。

いくら社長だからといって、長いこと会社を抜けては居られない。

一応双子の弟に会社を頼んでおいても目を通す書類は聡がやらなければ話が進まない。

父親が亡くなってからは、頭の優れた聡が社長、社交的な弟の健吾が副社長になり、この数年お互いを

カバーしながら業績を伸ばしてきた。

弟はさつさと同級生だった女性と世帯をもったが、聡は今まで勉強と仕事以外は興味もなく過ごしてきた。

でもある日資料を探しに入った図書館で夕菜を見つけ、それからはストーリー状態だ。

今まで女性にアプローチした経験もなくどんな風に夕菜に接して良

いのか解らない。

今日は最近図書館に現れない夕菜を心配してずっと朝から図書館の前で待つてしまった。

偶然を装い話しかけたまでは良かったが、ついホツとして図書館で居眠りをしてしまった。

彼女の側にいるとなぜか落ち着く自分に吃驚してしまう。

今までどんな時も気を張って生きてきた。

一応長男としてのプレッシャーも感じていたし、いずれ父親の跡を継いで輸入雑貨の会社を継がなければと漠然と考えてきた。大学卒業と同時に父親が脑梗塞で倒れるまではこんなに早く跡を取るなんて考えては居なかった。

おかげで眠れない日々を過ごし、今までは病院に通い薬を服用して眠れるようにはなったが、体がだるくて仕方がなかった。

でも彼女に会ってから薬を飲まなくても眠れるようになった。

これを恋だと弟は言うが俺にはよく解らない。

だが、最近彼女に会えなかった一週間はやはり眠れずまた薬の世話になった。

夏風邪だったと言った彼女はやはり前より少し痩せていた。

見た目はまだ学生のような彼女だがいつも昼過ぎから図書館で本を読んでいる姿を考えると社会人なのか？さすがに本人に聞けなくて気持ちが悪んでしまう。

早く告白をすればいいと弟は言うがそんなに簡単に物事は進まない。

不意に

「夕菜ちゃん、恋してる？」

突然の叔母さんの言葉に持っていたお盆を落としそうになった。（どうして？）

慌てて首を横に振る夕菜に、

「最近、夕菜ちゃん可愛くなったからてつきりそうだと思ったんだけどな・・・」

納得していない顔の叔母さんに今日こそは眼鏡の人・・・橘聡さんのことを話そうとしていると、

「こんにちわ、夕菜ちゃん頼みたい事があるんだけど良いかな？」

家の店の常連さんの山田さんがお店に入ってきた。店の混みぐあいを確認すると、叔母さんに手を合わせて、

「今日腰の具合が悪くて、花ちゃんの散歩に行けそうもないの、お願い夕菜ちゃんにお願いできないかな？バイト代払うから」

山田さんは70を超えたお婆ちゃん。一人暮らしだから前にお婆ちゃんが体を壊して入院していた時期、犬の花ちゃんの散歩をしてあげたら喜ばれた。それからたまにこうやって頼まれる。

今日はランチも終わって手が空いてるから、叔母さんにアイコンタクトを取り、良いか確認すると笑ってくれた。（良いよっていう返事）

「今から散歩、行ってきますね。バイト代は良いですからかわりにお店の売り上げに貢献して下さい」

夕菜が笑顔で話すと山田のお婆ちゃんも笑顔で、

「お安い御用です。このまま店でお茶して待っているから花ちゃんのことよろしくね」

夕菜はお店の外に出ると玄関で大人しく待っている花ちゃんに駆け寄った。

尻尾をぐるぐる回して喜ぶ花ちゃんはミックス犬で目がクリクリしていて可愛い、白い毛に覆われて尻尾もフサフサしていて夕菜はこの花ちゃんの尻尾がお気に入りだった。

リードを手に掛け、花ちゃんのペースに合わせて歩いてあげる。花ちゃんは小型犬だから引つ張られることは無いから細い夕菜でも大丈夫……

時々寄り道をして匂いを嗅いでいる花ちゃんの尻尾を触ってやると又歩き出す。それを繰り返していると近所の公園に辿り着いた。

「花ちゃんはなにをして遊びたい？」

夕菜が声を掛けると棒を一本拾ってきた花、夕菜がそれを投げてやると嬉しそうに棒を拾ってくる。何度も繰り返していると花ちゃんの顔が得意げに変化をしていく。

元々クリクリの目をもっと大きくして耳が後ろに立っている。（可愛い花ちゃん、）棒を投げてやり、走り出す花ちゃんの背を眺めていると、

「こんな所にいたんですか？ 捜したんですよ」

声の主は橘さん、なんで？（額に汗が……）

「中々今日は、夕菜さん、図書館に現れないから、又体調を崩したんじゃないかと思ったんですけど、一応公園を確認してから夕菜さんの事を諦めようと思っていたんですけど、会えて良かったです」笑顔の橘に夕菜は、

「今日は犬の散歩で、図書館は行けなかったんです」

夕菜の足元に棒を銜えた花が戻ってきた。尻尾を振って得意げに……なぜか橘の足元に行ってしまった。（花はメスだから橘さんみたくにかっこいい人の方が良いのかしら？）夕菜が考えていると、

「可愛いですね、夕菜さんの飼われている犬なのですか？」

橘は座り込み、花の頭を撫でている、終いには花は横になり、お腹まで見せる始末・・・（私でも三日は掛かったのに・・・）

「私の犬じゃなくて、お店のお客さんの犬なんです。今日は散歩を頼まれて・・・」

声が小さくて聞き取れなくても橘は気にする様子も見せず、

「お店は何のお店なんですか？夕菜さんさへ良かったら僕も伺いたいですので教えていただいても構いませんか？」

夕菜の顔を覗きこみ聞いてくる橘に顔を真っ赤にしながら夕菜は、

「叔母のやっている喫茶店なんです。この後良かったら一緒にどうですか？コーヒーが美味しいんですよ」

夕菜の言葉に橘は顔を明るくすると、

「俺コーヒー好きなんです。ぜひ連れて行って下さい」

砕けた感じの橘の様子に夕菜は思わず、笑顔が零れたが、すぐに花に視線を戻し、

「じゃ後少しだけ花に付き合ってもらっても良いですか？すいません花って犬の名前なんですけど・・・」

不意に（後書き）

更新遅くてすいません。

お互いの気持ち（前書き）

いつも更新遅くてすいません。

お互いの気持ち

花のお散歩を終え、店に戻ると花の飼い主の山田さんが店の入り口で待っていた。

山田さんを見つけた花は、尻尾をくるくる回して、山田さんに駆け寄って行く。

この瞬間が、ちょっぴり寂しい夕菜は、悲しそうな目をした。

「夕菜ちゃんありがとう」

山田さんの声で我に返ると、急いで駆け寄りながら隣に着いてくる橘の姿に足を止めた。

「すいません・・・駆け出したりして・・・自分から橘さんのことをお誘いしたのに・・・」

恥ずかしそうに俯くと、

「あの方が花の飼い主の山田さんです」

すぐに花の近くまで追いついた二人は、

「もしかして夕菜ちゃんの彼氏？」

につこり微笑みかけてくる山田さんに、質問をされた夕菜は顔を真っ赤にして、

「違います。図書館でお友達になった橘さんです。コーヒーが大好きだとお聞きしてお店にお連れしたんです」

必死に話す夕菜の姿に彼女の違う一面を見た気がして、聡は嬉しかった。

外の賑やかさに釣られて、里奈もお店の外を覗きに出てきた。夕菜を見付けると、笑顔で、

「夕菜ちゃん、お疲れ、中で冷たいものでもどうぞ・・・」

その時里奈の視線が、橘で止まり、

「もしかして夕菜ちゃんのお付き合いしている人」

山田さんと同じことを言い出す叔母さんに、夕菜は、

「お友達です。コーヒーがお好きだと聞いてお店にお連れしたんだけど・・・」

顔を真っ赤にして応えた。

橘は楽しくて仕方がなかった。顔を真っ赤にする夕菜を抱きしめたいと思ったが、そんなことはできない友達という関係に寂しくなるが、まずは周りから落とすかと気持ちを入れ替えた。

「夕菜さんと図書館でお友達になった橘聡です」

丁寧に里奈と山田さんに向かい、頭を下げた。

二人とも何気に顔を真っ赤にしている。それだけ聡は、人を惹きつける綺麗な顔をしていた。

「外じゃなんだからお店の中にどうぞ」

里奈は声を掛けると、山田さんは散歩で疲れた花を抱っこして

「夕菜ちゃんお散歩ありがとう。又お願いね」

と言いながら帰っていった。

カウンターに腰掛けた聡の姿に不思議な気がしてくる。

いつもその姿は図書館の中のある席にあるのに・・・今日は本じゃなくて手にはカップを持っている。

夕菜の苦手なブラックコーヒーを美味しそうに飲む聡の姿に夕菜はカウンターの中からじっと見とれてしまった。

「やっぱり二人付き合ってるの」

叔母さんが夕菜に耳打ちをしてくる。その言葉に顔を真っ赤にする、首を横に振った。

それに気付いた聡は、満面の笑みを叔母さんに向けると、

「此処のコーヒー、とても美味しいです。今度から私も常連にして

いただきます」

苦味の奥に深みがある味が聡は気に入った。

里奈はそんな橘の言葉に、微笑むと聡の心を見透かすように微笑んでくる。

お互いの気持ち（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

常連

「いらっしゃいませ」

カウンターに聡が腰掛けると、里奈の笑顔が毎度のように迎えてくれるようになった。

「いつもと同じで良かったです」

目の前に水とおしぼりを置きながら里奈が聞いてくる。

はいと答えながら、聡の目は、探し物をしながら忙しく狭い店内を見渡していた。

クスクスと里奈が笑いを堪えながら、目の前でコーヒートを淹れている。

目的のモノが見つからず、香りに誘われ、里奈の手元を見ると、
「今、夕菜ちゃん、御使いに行っているからすぐに戻ってきますよ」
そんな穏やかな声が耳に届いた。

目の前に淹れたてのコーヒーが置かれ、そっと手を伸ばした。

一口飲んで、美味しさを堪能していると、裏の方で、

「ただいま」

今一番会いたい人の声が聞こえてきた。その瞬間、里奈が、

「お帰り、夕菜ちゃん。彼がお待ちかねよ」

そんな事を目の前で言われると、聡の顔も何気に赤く染まってしまった。

夕菜は、カウンターに顔を出すと、

「いらっしゃいませ。叔母さんそんなこと言つと橘さんに失礼ですよ。ごめんなさい橘さん」

申し訳なさそうな表情をされると聡の方が申し訳なくなった。

でも里奈は負けていない。

聡に向かい小声で、

「早く告白しないと違う誰かに先を超されちゃいますよ」

そんな言葉を楽しげに投げかけてきた。

その瞬間、聡の心臓もドキドキした。

確かに今までは図書館でしか夕菜の姿を見ることは無かったが、今こうやって夕菜の姿を見ると、彼女、目当てでここに通ってきている常連客もいるはず・・・焦った気持ちになった。

それを楽しげに見つめる里奈

「いらつしゃいませ」

若いサラリーマンが店の中に入ってきた。ドアが開いた瞬間、聡の目も向いてしまう。

夕菜がお盆に水とおしぼりを載せて、お客の元にゆっくり歩いていった。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。夕菜ちゃん、そんなに簡単じゃないから・・・」

里奈の表情が寂しく見えた気が聡はした。

テーブルの方を見ると夕菜が注文を聞いている。

若いサラリーマンも常連なのか、今日は天気で助かったみたいな話を夕菜に振っていた。

それに笑顔で答える夕菜の姿に、聡は、思わず胸の中がイライラした。

あの笑顔を自分だけに向けて欲しいと思わず思ってしまう。

「どうしたんですか？橘さん」

いつの間にか戻ってきた夕菜の優しい声が耳に届いた。

「里奈さんアイスコーヒー一つお願いします」

お盆の上にストローをのせながら夕菜が叔母さんに注文を通す。

そんな姿を見つめているうちに、聡は自然と、

「夕菜ちゃんが休みの日、どっか遊びに行こうか？」

そんな事を口走っていた。

「でも私の休みの日は平日だけど、橘さん大丈夫なんですか？」

「それはもちろんだよ。休みぐらい夕菜ちゃんに合わせる」

「でもそんなの悪いです。私は橘さんがこうやって家の常連さんになつてくれて顔を毎日見られることが嬉しいですよ」

そんな事を言ってもらえるなんて思っていなかった聡は、顔が笑顔になっていた。

常連（後書き）

いつも遅くてすみません。

常連・2

結局無理言って俺は彼女の休みの日、外に連れ出した。

こんな風に外デートするなんて花ちゃんとの散歩以来で意識してしまうが俺の気持ちも知らずに夕菜ちゃんは楽しそうでこちらまで笑顔が漏れてくる。

「どっか行きたい場所ある？」

そんな風に聞くと、

「海・・・一度見てみたいんですけど良いですか？」

遠慮しながら聞かれるが、俺的には全然嫌じゃない。

むしろ、いかにもデートって感じで逆に嬉しい気持ちになってきた。

「良いよ、少し時間掛かるけど構わないかな？」

俺が心配そうに聞くと、笑顔で「はい」って答えてくれて嬉しくなる。

少しは脈があるのかと期待してしまう。

車の助手席を開けてあげると、

「ありがとうございます」

夕菜ちゃんが乗り込んだ。俺も運転席に乗り込むと、車を走らせる。

さっきから窓の外を楽しそうに見つめている夕菜ちゃん、その横顔が今は自分だけのモノだと思いと嬉しくなった。

一時間ほどで着いた海を目の前にすると、凄く嬉しそうな顔をした。

「これが海なんですね。こんな匂いがするんだ」

思いっきり目を見開いて、海を見つめる夕菜ちゃんは、本当に海に来たのが初めてなんだと思う。

「砂浜に下りてみる？」

声を掛けると、目をキラキラさせて、

「良いんですか？」

聞いてくる。

俺は頷くと夕菜ちゃんの腕を取った。

少しだけ彼女の体がビクツと震えた気がしたが、

「砂浜転びやすいから、手を繋ごう」

声を掛けると笑顔を向けてくれ、俺は心の中で安堵の溜息を吐いた。きつと里奈さんが言っていた簡単じゃないという事が少し解った気がした。

彼女は恋愛にはきつと慎重なんだろう。

「凄い海ってキラキラしてるんですね」

太陽を浴びた海を見つめて、話す夕菜ちゃんの姿に思わず君の方がキラキラしているよと言いたくなるが、おじさんに思われそうで、

「そうだね。海の水が太陽の光に反射してるだよ」

なんて当たり前に戻してしまう。

でも本当に夕菜ちゃんに輝いていた。

肌が白いから光を浴びすぎると消えてしまいそうな気がして心配になる。

彼女は俺から見ると本当に脆い存在に見える。

だから早く告白したくなるが、まだ早いと自分にブレーキを掛けた。今の状態で彼女の存在が俺の目の前から無くなるのは耐えられない。それだけ俺は彼女のことを好きだった。愛していると言っても良いぐらいの存在だった。

常連・3

海に行つてからの暫くたったが、俺は未だに彼女に自分の気持ちを伝えられずにいた。

昼過ぎの図書館に行くと、彼女の姿はいつもの席にあった。外は茹だるように暑かったが流石にここはクーラーが入って心地良い。

少し離れた席から彼女を見ていると、その横顔が綺麗で長い間見とれてしまった。

今なら告白できそうな勇気がわいてきて、そつと近寄ろうとした瞬間、背中を叩かれた。

振り返ると、弟の健吾が立っている。

「兄さん、会社から消えた後、いつもここで時間潰していたのか？」
回りのことを考え、小さい声で話す健吾、

「ああーそうだが・・もしかして俺の後をつけたのか？」

弟の行動が気に入らず不機嫌に聞くと、

「悪いがいつも兄さんが会社抜け出して何やってるか気になったから、つけさせてもらった」

まさか？俺のさっきの行動も？

「なあー彼女のことが好きなのか？」

彼女に視線を向け、話す健吾にイライラしながら、

「お前には関係ないだろう」

素っ気無く応えると、

「関係ないだろう。毎回、社長が会社から脱け出すなんて、社

員の手前困るんだよ」

声の高さがヒートアップする健吾に焦りを感じ、部屋の外に連れ出した。

今の話を彼女に聞かれていない事を祈った。

夕菜視点

さっき一瞬人の争う声が聞こえ、振り返ったが誰もいなかった。私の勘違いだったのか？

今日は聡さんはいつまで経ってもここには顔を出さなかった。きつと仕事が忙しいんだろうと思いながら、立ち上がる。そろそろ買い物でもしながら帰らなきゃ遅くなっちゃう。

窓から外を見ると雲一つない青い空が見える。
案の定外に出ると、暑かった。

一歩歩くたび、汗が吹き出し、目が回りそうになり、自動販売機でお茶を買うことにした。

自動販売機の前で人影が見えて驚いた。

聡さんが二人？

暑さのせいでおかしくなったかな？

そつとその場を離れ、ボーっとした状態で帰路についた。

店に戻っても、気になってしょうがない。

いくら暑さでおかしくなっても聡さんが二人に見えるなんて……

「どうしたの？考え事？」

叔母さんに声を掛けられて、思わず、

「今日聡さんが二人居たんです。それって変ですよな」

言ってしまった。心の中にあった言葉が口から出ていた。

「変ね。でもそれって彼が双子だったら有り得るんじゃない？」

得意気に話す叔母さん

さすが・・・叔母さん・・・感心していると・・・

「いらっしやいませ」

叔母さんが店の入り口に視線を向けた。私もとっさに、

「いらっしやいませ」

振り返ると、今一番気になっていた人がそこには、立っていた。

常連・3（後書き）

読んでいただいております。
いつも更新遅くてすみません。

常連・4

カウンターに座る聡さん

その姿を目で追いながら、さっきの光景を思い出していた。いつ見ても仕立ての良いスーツ、黒ぶちの眼鏡。きっと彼女が選んでいるのかな？

ふとそんなことを考えている自分に驚いた。

でも・・・きつとそれが当たり前かな？

聡さんは結婚していてもおかしくない年齢なんだし・・・

私は所詮、友達だから遠くで見つめているのがお似合いだね。自分にそう言い聞かせた。

私はきつと恋愛は不向きなタイプなんだと思う。

それに結婚に憧れの気持ちはなかった。

パパみたいになりたくない。

愛に永遠なんてない。

いつかは風化してしまう。そんなものなら私はいらない。

それをパパは教えてくれた。

だから一生独身でも良いと思っていた。

彼に出会う前までは・・・

どうして、そんな気持ちの変化がおきたのかは解らなかったが、

聡さんを見ていると幸せな気持ちになれた。

寝る前、目を閉じると・・・いつの頃からか？

彼の顔が浮かぶようになっていた。

この気持ちをきつと恋なんだと気付いてはいるが・・・

でももう一步踏み込めなかった。

気持ちにブレーキを掛ける自分がいた。

だから自分の心の中だけで、もしも？そんな事を想像してしまう。

「橘さんてもしかして双子のお兄さんとかいる？」

カウンターの中から、聞こえた叔母さんの声で我に返った。

そんなこと、聞いても大丈夫なの？

でも意外な答えが返ってきた。

「兄は俺で、弟がいます」

聡さんの穏やかな声が響いた。

「すいません。今日私図書館で見ちゃって、聡さんが二人に見えたから見間違いかな？」

なんて思っちゃって声を掛け損ないました」

夕菜の言葉に聡は盛大な溜息を吐くと、

「俺の方こそすいません。先に話すのが礼儀だったんですが、言いづらくて・・・」

でも見かけたのなら声を掛けてくれれば、良かったのに・・・」

穏やかな声なんだけど、少し落ち込んでるように聞こえたような気がした。

「でも良いですよ。兄弟がいるなんて私も姉妹がいたらもつと楽しかったかも・・・」

「私が夕菜ちゃんの姉でしょう。忘れたの？」

声を被せる様に話しかけてきた里奈の明るい声に聡は夕菜の悲しみに気付いた。

狭い店の中を歩き回りお客さんへの接待をする彼女の様子を目で追ってしまう。

さつきはあんな風に言ったが、きつとあの場で声を掛けられたら俺はいいだろう？

健吾の手前、彼女をなんと紹介したのか自信がなかった。

未だに告白できない俺は彼女の恋人ではない。

だったら友達？

その響きは俺には寂しいものだった。

早く自分の気持ちを伝えたいと思うのに、いつまで経っても成長しない俺がいた。

彼女の悲しみは全部俺が引き受けてあげたい。

「聡さん、焦らないほうがあの子のためなのよ」

優しい声が聞こえてきた。

振り返ると里奈さんが俺を見ていた。

俺の気持ちはきつとこの人にはばれている、そんな気がした。

「夕菜ちゃんは辛い思いをしたから、自分には、恋愛は無理だと思っっている部分があるの。」

だからあの子のことを本当に好きなら、あの子が自分の気持ちを私に相談するまで待つて欲しいの」

穏やかな声なのに、絶対に引かないという口調で言われ俺は、

「解りました。その代わりその話を詳しく教えてもらって良いですか？」

そう応えていた。

結局明日の定休日の午前中、里奈さんとは会う約束をして俺はこの日店を後にした。

常連・5

その日は気持ちとは裏腹に空は快晴だった。

俺の気持ちは、彼女の過去を聞ける喜びと、それを彼女以外の人から聞きだすことに対しての罪悪感の気持ちが入り組んでいた。

約束の場所の喫茶店に行くと里奈さんはすでに来ていた。

本当に俺が聞いているのかこの時はまだ悩んでいたんが、

「今から話す内容を聞いても夕菜ちゃんのこと好きでいる自信がある？」

真剣な顔で里奈さんに問い掛けられ、

「聞かせて下さい。夕菜ちゃんの過去も含めて全部好きになりたいんです」

心は決った。

コーヒーを一口飲むと、溜息を一つ吐いて語りだす里奈さん

「夕菜の本当のお母さん、夕菜が小学校の高学年の時亡くなったの。暫くは夕菜のお父さん、私の兄なんだけど、一人で頑張って夕菜のこと育てていたんだけど・・・」

夕菜が中学に上がった頃再婚したの。

再婚相手は同じ職場の人だったんだけど、後から夕菜のお母さんが生きていた頃・・・

二人が不倫していたことが夕菜にばれちゃったの・・・

それも義母の口から・・・

兄が知らないところであの女夕菜ちゃんに暴力を振るっていたみたいで、その時口走ったみたいなの、

私の所に夕菜が家出てきたことがあってそのことが解ったんだけど、それから夕菜、

人間不信になったというか・・・自分の父親も信じられなくなっちゃって・・・

男の人は浮気をするものだと思い込んだみたいなの、だから男の人を信用できなくて一時は凄惨悩んでいたみたいで・・・

不眠症になって眠れなかったみたいなの、

夕菜はあの女に体も心も傷付けられて私の目から見ても可哀想で見えなくなって、夕菜が、

高校を卒業した後、家でひき取ったの。

兄はあの女に騙されているから、どうすることもできなくて・・・

┌

一気に話し終えた里奈さんは悲しそうな顔をした。

自分が考えていたよりもつと辛い過去を持っていた夕菜ちゃん・・・こんな俺が夕菜ちゃんを救ってあげられるのか自信がなくなりそうになった。

でもあの笑顔を自分だけのものにしたいと想う気持ちにかわりは全くない。

愛しい気持ちは前よりも深くなった。

「俺が絶対に夕菜ちゃんを守ります。だからゆっくり見守ってもらえますか？」

里奈さんに向かい頭を下げていた。

頭を上げると里奈さんは穏やかな笑みを浮かべ俺を見ていた。

一瞬不安が過ぎたが、

「夕菜のこと、よろしくお願いします」

そう言う俺に向かい頭を下げた里奈さんの態度に俺の気持ちは固まった。

俺は絶対に今度こそ夕菜ちゃんに告白すると・・・

常連・5（後書き）

今年の更新はこれが最後です。

読んでくれてありがとうございます。

来年もぜひ読んで下さい。お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6787t/>

そんなはずじゃなかった

2011年12月30日22時50分発行